

『源氏物語』 朱雀院の五十の賀

— 「摩訶毘盧遮那の」が導くもの —

春日美穂

はじめに

『源氏物語』「若菜下」巻の巻末には、朱雀院の五十の賀が延引を重ね、年末にやっと思われたことが描かれる。

御賀は、二十五日になりけり。かかる時のやむごとなき上達部の重くわづらひたまふに、親はらから、あまたの人々、さる高き御仲らひの嘆きしをれたまへるころほひにて、ものすさまじきやうなれど、次々にとどこほりつるこ

とだにあるを、さてやむまじきことなれば、いかでかは思しとどまらむ。女宮の御心の中をぞ、いとほしく思ひきこえさせたまふ。例の五十寺の御誦經、また、かのおはします御寺にも摩訶毘盧遮那の。

（「若菜下」四—二八四—二八五頁）⁽¹⁾

「御賀は、二十五日になりけり」という筆致からは、賀の祝いでありながら年を越してしまう事態をなんとか回避できた状況が伝わる。しかし、次に語られるのは柏木の重病と、それにより人々が心痛を抱えていることであり、光源氏が後見する

女三の宮主催の御賀の華やかさはない。そして、五十の賀にあわせ、五十の寺での誦経と、「かのおはします御寺にも摩訶毘盧遮那の」と、朱雀院のいる西山の御寺でも仏事が行われたことが記される。

この場面について新編全集は、「省筆の末尾の暗澹たる余韻の中から、やがて柏木巻の悲劇が語り起こされる」（「若菜下」四—二八五頁）と評している。また、玉上琢彌も「古来いわれるとおり、余韻を感じべきである」と、省筆と、それが「梵語」で閉じられていることに着目している。新大系脚注は、大日経が西山の寺で読まれたことであるとし（「若菜下」四—四〇八頁）、集成頭注は、「文意に読める」とその内容について留保したうえで、本文が失われている可能性にも言及している（「若菜下」四—二六三頁）。袴田光康氏は、中断の表現に救済されない柏木の魂の問題を読み取るなど、「省筆、中断」に着目する指摘が多いものの、その内実は諸注によって解釈が分かっている。

この場面は古注釈においても様々な解釈がなされている。代表的なものとして、『紫明抄』が「この巻のをはりのかくのことし、如何」と、やはり省筆、中断に着目したうえで、摩訶毘盧遮那を誦すことで罪を除きたい思いがあるのだとし、『花鳥

餘情』『岷江入楚』は西山の寺の准拠とされる仁和寺円堂の本尊が大日如来であること、そこで摩訶毘盧遮那の誦経をしたのだと指摘している。

朱雀院が出家した「西山なる御寺」（「若菜上」四—一八頁）は、仁和寺をイメージするものであるとされてきた。西山そのものに仁和寺を指す用例はなく、西山の御寺は仁和寺を含む御願寺のイメージを見るべきであることを指摘したが、仁和寺であると仮定しても、諸注が指摘する円堂は、応仁の乱により焼失しており、その詳細を確認することはできない。仁和寺金堂の本尊が阿弥陀如来であることを考えれば、金堂ではなく円堂の本尊について言及することには疑問が残る。それに対し『孟津抄』は、真言密教の寺である仁和寺であるため摩訶毘盧遮那としたのだろう、と指摘する¹⁰。円堂の本尊にも触れているが、真言への重さに着目して毘盧遮那を導いたのだ、という注になっているといえる。

毘盧遮那は、密教で最重要視されている大日如来と同じであるとされる¹¹。

しかし、寛平二年の太政官符には、以下のような記載がある。

如今 聖主陛下。近為_レ莊嚴山陵。遠為_レ興隆佛法。建_二

立精舎於山陵。奉_レ廻_二白業於聖靈。廻向之志既期_三万劫。紹隆之誠豈限_二一代。(中略)昼則令_レ轉_レ讀金光明妙法花_一。專以護_二誓聖主_一宝祚。夜則念_二持弥陀真言等_一。一向奉_レ廻_二先帝聖魂_一。

(新訂増補国史大系『類聚三代格』寛平二年(八九〇) 一月廿三日 一〇一〜一〇二頁)

この太政官符に記されるように、仁和寺の役割として昼は帝の御世のために祈り、夜は阿弥陀の真言を念持することが挙げられていること、本尊が阿弥陀如来であることを考えた場合、阿弥陀ではなくあえて毘盧遮那仏が言及されることには疑問が残る。

そもそも、毘盧遮那には『源氏物語』には本場面のみ、平安期の文学作品を見ても、以下の『栄花物語』の法成寺の様子を記した例があるのみである。

廊を渡りて大御堂に参れば、中台高きいめしうおはします。「摩訶毘盧遮那とこれをなん申す」とて、普賢經の文を言ひ聞かす。「釈迦牟尼仏を毘盧遮那と名付けたてまつる。一切の所に遍じたまへる故に、その仏の住所をば、

常寂光と名付く。常波羅蜜の無常の所、我波羅蜜の愛敬の所、淨波羅蜜の有相を滅する所、六波羅蜜の身心相に住せる所、有作無作の諸法の相を見ざる所、如なり、相なり、解脱なり、乃至般若波羅蜜なり」となど思ひつづけ、言ひ聞かす。(新編日本古典文学全集『栄花物語』巻第十八

「たまのうてな」二一三二七頁)

この例は、藤原道長創建の法成寺の金堂に毘盧遮那仏が安置されたことを示す例である。巻名「たまのうてな」に示されるように、贅を尽くして建立し、法成寺阿弥陀堂で死去するほど道長の深い帰依を受けた寺の金堂に毘盧遮那仏が安置されたことには、毘盧遮那仏に対する信仰心が見出せる。しかし、平安期の文学作品に二作品三例しか見られないことや、仁和寺の本堂、円堂の問題からいっても、「毘盧遮那仏」として仏に意味があるのか、「毘盧遮那法」として修法が行われたのか、「毘盧遮那經」が読まれたのかを特定することは困難である。また、用例の少なさから当時の人々にとって身近な信仰の対象とは言いがたい。

このことを鑑みただうえで、毘盧遮那仏と同義である大日如来の用例を確認しても、以下の『源氏物語』の例と『栄花物語』

の例が見られるのみである。

物の怪にわづらひたまふ人は、重しと見れど、さはやぎたまふ隙もありてなむものおぼえたまふ。昼、日中の御加持はてて、阿闍梨一人とどまりてなほ陀羅尼読みたまふ。よろしうおはします喜びて、「大日如来虚言したまはずは。などてか、かくなにがしが心をいたして仕うまつる御修法に験なきやうはあらむ。悪霊は執念きやうなれど、業障にまとはれたるはかなものなり」と、声は嘎れて怒りたまふ。

〔夕霧〕四—四一六頁)

『源氏物語』の例は、一条御息所の加持を行う阿闍梨が、自身の修法の効果を示す言葉の中で、「大日如来虚言したまはずは」と述べるものである。

やうやう仏を見たてまつらせたまへば、中台尊高きいかめしくましまして、大日如来おはします。光のなかの化仏無數億にして、無量莊嚴具足し、宝鐸、宝鈴、もろもろの璣珞、上下四方種々光明照らし耀けり。

(巻第十七「おむがく」二—二七七頁)

『栄花物語』の例は、先に掲出した例と同じく法成寺金堂の大日如来の様子である。先の場面では毘盧遮那、ここでは大日如来とされている点で、このふたつが同じものとして捉えられていることが確認できる。一方で、これらの用例しか確認できないことから、「若菜下」巻末の毘盧遮那が具体的に何を指したかを特定することはやはり困難であるといえよう。それほど解釈が難しい、さらにいえば、身近な信仰の対象であつたと言いがたい毘盧遮那が、朱雀院の五十の賀を閉じる語としてあらわれることの意味を考えてみるべきではないだろうか。

本論では、「若菜下」巻朱雀院の五十の賀における「摩訶毘盧遮那の」の表現が導くものについて検討したい。

一、女三の宮主催の朱雀院の五十の賀

賀については多くの史料があり、また、研究も積み重ねられている⁽¹⁴⁾。永井和子氏は、「算賀は有限な人間を明確な生物的存在として置き換える明確な節目であり、その慶賀と老いととの両義的な複雑さは見逃し得ない」と指摘しており、めでたさと老いという両義性を含んだものである賀の特徴への指摘は示唆的である。

以上のことをふまえたうえで、女三の宮主催の朱雀院の五十の賀について検討するために、まず、女三の宮主催の朱雀院の五十の賀のあらましを確認したい。

朱雀院の、今はむげに世近くなりぬる心地してももの心細きを、さらにこの世のことかへりみじと思ひ棄つれど、対面なんいま一たびあらまほしきを、もし恨み残りもこそすれ、ことごとしきさまならで渡りたまふべく聞こえたまひにければ、大殿も、「げにさるべきことなり。かかる御気色なからむにてだに、進み参りたまふべきを。ましてかう待ちきこえたまひけるが心苦しきこと」と、参りたまふべきことと思しもうく。

ついでなくすさまじきにてやは、這ひ渡りたまふべき、何わざをしてか、御覧ぜさせたまふべき、と思しめぐらす。このたび足りたまはむ年、若菜など調じてやと思して、さまざまの御法服のこと、斎の御設けのしつらひ、何くれと、さまことに変れることどもなれば、人の御心しらびども入りつつ思しめぐらす。（『若菜下』四—一七九—一八〇頁）

朱雀院の五十の賀は、自らの寿命が尽きることを感じて心細

く思った朱雀院が、出家者として「この世のことかへりみじ」と思ひはしたものの、女三の宮と会わずに亡くなり、恨みが残ってしまったら困る、という思いから、大げさではない様子でなんとか来られないかと意向を示したことがきっかけで計画された。

それを聞いた光源氏は、朱雀院の五十の賀を企画し、まず今上帝主催のものが開催されることを予想し、時期を二月半ばに設定する（『若菜下』四—一八三頁）。

湯浅幸代氏は、『源氏物語』の算賀は、皇統の家父長としての太上天皇の存在を重視していると指摘し、袴田光康氏も、直系皇統における上皇の父権的権威に重きが置かれた王統の理想世界を映し出していると指摘する。⁽¹⁷⁾ 朱雀院の御賀が、朱雀院の権威の強化の役割を果たしている点をまず確認しておきたい。

朱雀院は、御賀の際に女三の宮の琴の琴を聞きたいという意向を漏らしている（『若菜下』四—一八一頁）。「さりとも琴ばかりは弾きとりたまひつらん」という朱雀院の言葉からは、光源氏と女三の宮の夫婦仲がうまくいっていないことへの無念さがにじむ。そこに今上帝も追隨し、光源氏は女三の宮に琴を教えざるを得なくなる（『若菜下』四—一八一頁）。このことは六条院の女楽へと発展するが（『若菜下』四—一八五頁）、女楽の

後、物思いに耐えかねた紫の上が発病する（「若菜下」四—二一二頁）ことを考えると、紫の上の発病、それによる六条院の混乱とその間隙をぬう柏木と女三の宮の密通の遠因に、朱雀院の五十の賀があったといえる。

結局女三の宮主催の御賀は紫の上の発病だけではなく、女三の宮の懷妊が重なり、延引を重ねる。

かくて、山の帝の御賀も延びて、秋とありしを、八月は、大将の御忌月にて、樂所のこと行ひたまはむに便なかるべし、九月は、院の太后の崩れたまひにし月なれば、十月にと思しまうくるを、姫宮いたくなやみたまへば、また延びぬ。衛門督の御あづかりの宮なむ、その月には参りたまひける。太政大臣あたちて、いかめしく、こまかに、ものものきよら、儀式を尽くしたまへりけり。督の君も、そのついでにぞ、思ひ起こして出でたまひける。

（「若菜下」四—二六六頁）

十月には女二の宮による御賀が行われ、詳細は語られないものの、致仕大臣自らが取り仕切る華やかなものであったと推測される。

参りたまはむことは、この月かくて過ぎぬ。二の宮の御勢ひことにて参りたまひけるを、古めかしき御身ごまにて、立ち並び顔ならむも憚りある心地しけり。「十一月はみづからの忌月なり。年の終はり、はた、いとももの騒がし。また、いとどこの御姿も見苦しく、待ち見たまはむをと思ひはべれど、さりとてさのみ延ぶべきことにやは。むつかしくもの思し乱れず、あきらかにもてなしたまひて、このいたく面瘦せたまへるつくりひたまへ」など、いとらうたしと、さすがに見たてまつりたまふ。

（「若菜下」四—二七一—二七二頁）

光源氏は、十月に御賀ができなかったことについて、身重の女三の宮が、これ以上月を重ねればさらに見苦しい姿になるとしつつも、「いとらうたし」と思っており、御賀を行わなければならぬプレッシャーと、柏木とのことを受け入れられない気持ち、女三の宮をいたわしく思う気持ちとでその心内は複雑である。

御賀はやつと十二月十日過ぎに行われることとなり（「若菜下」四—二七三頁）、光源氏からの要請により、柏木が六条院に参上する。

致仕の大臣思ひおよび申されしを、冠を掛け、車を惜しまず棄ててし身にて、進み仕うまつらむにつく所なし、げに下臈なりとも、同じごと深きところはべらむ、その心御覽ぜられよ、ともよほし申さるることはべしかば、重き病をあひ助けてなむ、参りてはべし。今は、いよいよとかすかなるさまに思し澄まして、いかめしき御よそひを待ちうけたてまつりたまはむこと、願はしくも思すまじく見たてまつりはべしを、事どもをばそがせたまひて、静かなる御物語の深き御願ひかなはせたまはむなむ、まさりてはべるべき」と申したまへば、いかめしく聞きし御賀のことを、女二の宮の御方さまには言ひなさぬも、労ありと思す。

〔若菜下〕四—二七六—二七七頁〕

光源氏は、女二の宮の御賀の盛大さを、あくまで父が行ったこととして語る柏木に感心しており、柏木への複雑な思いと、女二の宮主催の朱雀院の御賀の華やかさが改めて描かれる。

しかし、「過ぐる齢にそへては、酔泣きこそとどめがたきわざなりけれ。衛門督心とどめてほほ笑まるる、いと心恥づかしや。さりととも、いましばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老は、えのがれぬわざなり」〔若菜下〕四—二八〇頁〕と光源

氏に言葉をかけられた柏木はひどく惑乱し、そのまま重態に陥つたため、今上帝、そして、朱雀院も非常に心配し、御賀を行う雰囲気ではなくなる〔若菜下〕四—二八四頁〕。年をまたぐことはできないため、やっと二十五日に行われたのが冒頭に掲げた場面であった。

以上のことをまとめると、武者小路辰子氏⁽¹⁸⁾、川名淳子氏⁽¹⁹⁾が指摘するように、朱雀院の五十の賀は紫の上の発病、柏木と女三の宮の密通、柏木の重態と深く関わっている。また、延引を重ねざるを得なかった一方で、致仕大臣がバックアップした女二の宮が主催する御賀が成功をおさめたことで、女三の宮主催の五十の賀にまつわる問題や困難さが対比的に際立つように描かれているといえよう。

二、『源氏物語』の算賀

以上の女三の宮主催の朱雀院の五十の賀について検証するために、『源氏物語』内の算賀について確認したい。物語の初めての例は、「紅葉賀」巻の一院の御賀であった。

朱雀院の行幸は神無月の十日あまりなり。世の常ならずお

もしろかるべきたびのことなりければ、御方々見たまはぬことを口惜しがりたまふ。上も、藤壺の見たまはざらむをあかず思さるれば、試楽を御前にてせさせたまふ。

源氏の中将は、青海波をぞ舞ひたまひける。片手には大殿の頭中将、容貌用意人にはことなるを、立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり。(「紅葉賀」一一三二頁)

新編全集頭注が、「次巻の桜花宴とともに、桐壺院晩年の威儀を語る。源氏を中心に発揮される卓抜な学芸の才が、桐壺治政の聖代の証ともみられる」と指摘するように、光源氏により青海波が舞われ、桐壺帝の御世の素晴らしさを、主に文化的な側面から示したものであった。一方で高田祐彦氏は、この一院の御賀が、光源氏の栄光と罪との不可分の関係を示す場であると指摘し、袴田光康氏は、一院の御賀と朱雀院の御賀から、直系皇統から疎外される冷泉帝の問題を指摘しており、『源氏物語』における院の算賀とは、皇統の強化とともに、冷泉帝の問題を浮かび上がらせるものであることが理解される。

次に描かれるのが紫の上の父、式部卿宮の五十の賀である。

式部卿宮、明けん年ぞ五十になりたまひけるを、御賀のこ

と、対の上思し設くるに、大臣もげに過ぐしがたきことどもなり、と思して、さやうの御いそぎも、同じくはめづらしからん御家居にてと急がせたまふ。年かへりては、ましてこの御いそぎのこと、御としみのこと、楽人舞人の定めなどを、御心に入れて営みたまふ。経仏、法事の日の御装束、祿どもなどをなん、上はいそがせたまひける。東の院にも、分けたまふことどもあり。御仲らひ、ましていとみやびやかに聞こえかはしてなん過ぐしたまひける。

世の中響きゆすれる御いそぎなるを、式部卿宮にも聞こしめして、年ごろ世の中にはあまねき御心なれど、このわたりをばあやにくに情なく、事にふれてはしたなめ、宮人をも御用意なく、愁はしきことのみ多かるに、つらしと思ひおきたまふことこそはありけめ、といとほしくもからくも思しけるを、かくあまたかづらひたまへる人々多かる中に、とり分きたる御思ひすぐれて、世に心にくくめでたきことに、思ひかしづかれたまへる御宿世をぞ、わが家まではにほひ来ねど、面目に思すに、またかくこの世にあまゐるまで、響かし営みたまふは、おぼえぬ齡の末の栄えにもあるべきかなと喜びたまふを、北の方は心ゆかずものしとのみ思したり。女御の御まじらひのほどなどにも、大臣の

御用意なきやうなるを、いよいよ恨めしと思ひしみたまへるなるべし。
〔少女〕三―七六―七八頁

ここでは「経仏、法事の日の御装束」を紫の上が準備したとあり、賀の祝いに仏事があつたことは確認できるものの、朱雀院の五十の賀のように仏の名が明示されることはない。花散里と紫の上との調和が描かれるなど、紫の上のすぐれた様子が伝わる一方で、注目されるのは、主催者は紫の上であり、具体的な準備も紫の上がしているにもかかわらず、波線部で式部卿宮が想起しているのは光源氏のことであるという点だ。もちろん、光源氏の須磨退去に関わる式部卿宮との複雑な背景が関係していることが大きい、具体的な準備は紫の上が行つても、式部卿宮の五十の賀の価値が光源氏がサポートしている点にあることは、朱雀院の五十の賀を考へるうえでも重要である。すなわち、算賀の成功は、それを主催する人物の問題ではなく、その背景にいる人物、ここでは光源氏の問題と直結するという点である。これは、女二の宮の御賀の価値が、柏木や致仕大臣と直結して描かれていることにもつながる。女三の宮主催の朱雀院の五十の賀が延引を重ねたうえに、皆の心が柏木の病にある状況は、光源氏の立場を揺るがすものであつたといえるのだ。

次に描かれるのが光源氏の四十の賀である。玉鬘、紫の上、秋好中宮、夕霧と行われる算賀の中で注目されるのが紫の上の主催のものである。

神無月に、対の上、院の御賀に、嵯峨野の御堂にて薬師仏供養じたてまつりたまふ。いかめしきことは、切に諫め申したまへば、忍びやかかと思しおきてたり。仏、経箱、帙寶のととのへ、まことの極楽思ひやらる。最勝王経、金剛般若、寿命経など、いとゆたけき御祈りなり。

〔若菜上〕四―九二―九三頁

「薬師仏供養じたてまつりたまふ」と、朱雀院の五十の賀のように、具体的な仏の名前や、朱雀院の場合は省筆された可能性のある具体的な経典が明示されている。ここで祈りの対象となるのは薬師仏である。薬師如来とは身体的欠陥を除く仏であり、新編全集頭注が「源氏の長寿を祈願するために供養する」と指摘するように、御賀に祈る仏としてふさわしいといえる。『源氏物語』にはもう一例薬師仏の例があり、薫が手厚く心を寄せている（「手習」六―三三八頁）。また、薬師仏は、『枕草子』一九七段「仏は」の章段の中に見られ、紫の上主催の御

賀の中で描かれる最勝王経、金剛般若、寿命経のうち、金剛般若には『枕草子』『経は』の章段の中に見られる。『経は』の章段には「薬師経」も描かれている。「経は」の章段に見られない最勝王経、寿命経も他の平安期の文学作品の中には描かれており、この三つの経は当時の人々にとって一定程度なじみのあるものであったといえよう。ここに毘盧遮那に関わる経がないことは注意しておきたい。

薬師仏は、河内山清彦氏⁽²⁶⁾、池田節子氏が、朱雀院の五十の賀の描写に影響していると指摘する『うつほ物語』大后の六十の賀の記述にも見られる。

「いと易きことにこそあれ。来年こそは足りたまふ年におはしますらめ。子の日がてら参りたまへかし。はやあるべからむことをせさせたまへ」。宮、「みなしたるを、かつけ物なむまだしき。異人々は、功づくことをなむ。黄金の薬師仏、五尺にて七ところ、経などさらにせらるなり。小宮は法服をなむしたまふなる」。

(新編日本古典文学全集『うつほ物語』

「菊の宴」二一三五頁)

新編全集頭注は、ここでの経は「『薬師経』であろう。薬師仏の本願と功德をたたえた経」と指摘する。

これらのことを考えれば、朱雀院の五十の賀において呼び込まれる仏もまた、薬師仏でもよかったといえよう。藤原忠平の五十の賀の齋会が行われた法性寺の本堂には、毘盧遮那像と薬師如来像が安置されていたことが記される。

十七日、左大臣子息四人、共於法性寺設五十賀齋会、其儀、本堂毘盧遮那像前安置銀薬師如来像、安置六角仏殿、内画薬師淨土、外金時絵、殿頂安永精火炎珠、

(史料纂集『吏部王記(増補)』延長七年(九二九)九月

三三三頁)

算賀と毘盧遮那の関係を示すのはこの例のみであるが、この例に薬師如来の記述があることは示唆的である。

秋好中宮主催の光源氏四十の賀では、四十の寺に祈禱をさせている。⁽²⁸⁾

十二月の二十日あまりのほどに、中宮までさせたまひて、今年の残りの御祈りに、奈良の京の七大寺に、御誦経、布

四千反、この近き京の四十寺に、絹四百疋を分ちてせさせたまふ。
〔若菜上〕四—九七頁〕

光源氏の御賀では四十の寺、朱雀院の御賀では五十の寺と内容が近接しているにも関わらず、光源氏四十の賀や『うつほ物語』で描かれる葉師仏ではなく、毘盧遮那仏が呼び込まれることには、朱雀院五十の賀の固有の問題、さらにいえば朱雀院固有の問題があるといえよう。朱雀院固有の問題とは何か。それは、朱雀院が修法を中心とした仏事によって御世とかかわってきたことを再確認する意味があつたのではなかったか。

三、朱雀院と仏教

朱雀院は帝位にあるときから、危機的な状況の際、修法を中心とした仏事によって回避しようとしてきた。

わづらはしさのみまされど、尚侍の君は、人知れぬ御心し通へば、わりなくてもおぼつかなくはあらず。五壇の御修法のはじめにてつつしみおはします隙をうかがひて、例の夢のやうに聞こえたまふ。

〔賢木〕二—一〇四—一〇五頁〕

「京にも、この雨風いとあやしき物のさとしなりとて、仁王会など行はるべしとなむ聞こえはべりし。内裏に参りたまふ上達部なども、すべて道閉ぢて、政も絶えてなむはべる」など、はかばかしうもあらず、かたくなしう語りなせど、京の方のことと思せばいぶかしうて、御前に召し出でて問はせたまふ。
〔明石〕二—二三四—二三五頁〕

このことは河添房江氏が、朱雀帝の御世の特徴になっていると述べる^⑩とおりである。

平安時代の古記録類に唯一見られる毘盧遮那法の例が以下である^⑪。

自今日勝義僧都於宮修摩訶毘盧遮那法、阿闍梨慶祚修阿弥陀法、御存生之御願也、

（大日本古記録『小右記』長保元年（九九九）
二月一八日 二—七九頁）

昌子内親王の生前の願いにより行われた仏事が、摩訶毘盧遮

那法と阿弥陀法であった。太皇太后の生前の願いとして摩訶毘盧遮那法が選ばれていることから、摩訶毘盧遮那法の修法としての威力の強さ、さらには国家鎮護の効力があつたことも推測される。

朱雀院は、五壇の御修法、仁王会、出家の場所が密教寺院である仁和寺を想起させる西山、そして毘盧遮那と、修法によって国家のために祈る色彩の濃い仏教的な表現に彩られているのだ。

もちろん、朱雀院の五十の賀に際し、毘盧遮那を関与させることを決めた主体者は描かれていないためわからない。しかし、光源氏の四十の賀では、祝われる光源氏の意向が一定程度反映されている。

神無月に、対の上、院の御賀に、嵯峨野の御堂にて葉師仏供養じたてまつりたまふ。いかめしきことは、切に諫め申したまへば、忍びやかかと思しおきてたり。

〔若菜上〕四一九二―九三頁

今年はこの御賀にことつけて行幸などもあるべく思しおきてけれど、「世の中わづらひならむこと、さらにせさせた

まふまじくなむ」と辞び申したまふことたびたびになりぬれば、口惜しく思しとまりぬ。〔若菜上〕四一九七頁

紫の上には自身の賀の祝いを派手にしないようにという意向を伝え、冷泉帝には行幸をやめるように伝えている。このことを考えれば、朱雀院の五十の賀についても、朱雀院の意向が反映された可能性があり、そうでなかったとしても朱雀院にふさわしいものとして毘盧遮那が選ばれていることに意味があるといえる。そしてその意味とは、光源氏が行ってきた文化によって世を領導するという手法が瓦解し、朱雀院が選んできた修法を中心とした仏事で世を治める手法が勝った瞬間を描いたものであつたということなのではないだろうか。

もちろん、光源氏の四十の賀にも、前述した紫の上主催のものでは最勝王経という国家鎮護のための経が読まれており、光源氏の四十の賀に国家のために仏教的に祈る側面が全くなかつたということはない。

しかし、光源氏の四十の賀は、以下のように、壮麗な舞宴により文化的な側面が強調され、また、人々が一院への行幸を思い出し、光源氏も昔を回顧するなど、桐壺院の御世が投影されるものであつた。

未の刻ばかりに樂人参る。万歳樂、皇聲など舞ひて、日暮れかかるほどに、高麗の乱声して、落蹲の舞ひ出でたるほど、なほ常の目馴れぬ舞のさまなれば、舞ひはつるほどに、権中納言、衛門督おりて、入り綾をほのかに舞ひて、紅葉の蔭に入りぬるなごり、飽かず興ありと人々思したり。いにしへの朱雀院の行幸に、青海波のいみじかりし夕、思ひ出でたまふ人々は、権中納言、衛門督のまた劣らずたちつづきたまひにける、世々のおぼえありさま、容貌、用意などをもさをさ劣らず、官位はやや進みてさへこそなど、齢のほどをも数へて、なほさるべきにて昔よりかくたちつづきたる御仲らひなりけりとめでたく思ふ。主の院も、あはれに涙ぐましく、思し出でらるることども多かり。

〔若菜上〕四—九五頁

このことについては浅尾広良氏が詳細に検討し、桐壺帝の継承者として光源氏を位置づけるものであったと指摘するとおりである。³¹⁾ こうした光源氏の在り方は、試樂を行う〔若菜下〕四—二七三頁）など、朱雀院の五十の賀についても文化的な面から盛り上げようとする姿に表れている。しかし、柏木に皮肉を言つて追い詰め、文化的な面から賀宴を盛り上げることが不

可能にしたのもまた光源氏であるのだ。朱雀院の五十の賀で舞樂などが全く行われなかったかは不明だが、仮に行われても、柏木の病によつて当初の予定より劣るものであったことは十分に推測できる。そして、実際の文化的な側面は一切描かれず、五十寺の誦經、摩訶毘盧遮那という世のための祈りのみが描かれることで、光源氏が今まで行つてきた文化によつて世を領導するという手法が瓦解した瞬間が描きとられているといえるのである。

このあと、朱雀院は光源氏の制止を振り切り、女三の宮を出家させる。

とかく聞こえ返さひ思しやすらふほどに、夜明け方になりぬ。帰り入らむに、道も昼ははしたなかるべしと急がせたまひて、御祈禱にさぶらふ中に、やむごとく尊きかぎり召し入れて、御髪おろさせたまふ。いと盛りにきよなる御髪をそぎ棄てて、忌むこと受けたまふ作法悲しう口惜しければ、大殿はえ忍びあへたまはず、いみじう泣いたまふ。院、はた、もとより、とりわきてやむごとなう、人よりもすぐれて見たてまつらむと思ししを、この世にはかひなきやうにないたてまつるも飽かず悲しければ、うちしほ

たれたまふ。「かくても、たひらかにて、同じうは念誦をも勤めたまへ」と聞こえおきたまひて、明けはてぬるに急ぎ出でさせたまひぬ。
〔柏木〕四—三〇八頁

まさにそれは、「御祈禱」の最中の出来事であつた。もちろん、朱雀院にとつても女三の宮の出家は最後の手段であり、無念さをぬぐえないものである。また、室田知香氏が指摘するように、朱雀院の父としての側面が強く出た措置であるともいえる。⁽³⁾しかし、朱雀院が出家という仏教的な側面から、女三の宮と柏木の密通から始まった膠着状態を強制的に収束させた面を見逃すことはできない。これは女三の宮を守る手段であると同時に、この事態が表沙汰になったときの混乱を考えれば、今上帝、ひいては朱雀皇統の安泰にも寄与した出来事であつたからである。朱雀院の仏事に頼る姿勢は、皇統の維持にも十分に寄与したものであつたのである。

おわりに

「若菜下」巻の巻末「摩訶毘盧遮那の」の表現については、古来より様々な解釈がなされてきた。その理由としては、『源

氏物語』をはじめとする平安期の文学作品や歴史資料に、「摩訶毘盧遮那」や「大日如来」の記述が少ないことが挙げられる。それゆえにその具体的な内容を特定することはできない。しかし、女三の宮主催の五十の賀が延引を重ね、また、柏木の病という暗さを帯びたものとなったことは、女三の宮だけの問題ではなく、むしろ光源氏にこそ深く関わるものであつた。

朱雀院が国家的な危機に仏事をもつて対応しようとする姿は、平安期の帝のとるべき姿のひとつであつた。⁽³⁾そして、朱雀院にとつても不本意な形ながら、女三の宮と柏木の問題が、朱雀院が終始選び取ってきた姿勢、すなわち、仏事によって危機に対応するという形で最終的に収束することは、文化によって物事に対応してきた光源氏の手法がもはや限界となつたことを示すものであつたのである。

朱雀院の五十の賀における「摩訶毘盧遮那」という表現は、朱雀院、光源氏のそれぞれの世との向き合い方を映し出し、光源氏の、桐壺院の御世を思わせる文化によって世を領導する姿勢や、それにより御世が華やかとなつた時代が終わつたことを告げるものであつたのだ。

(1) 本文の引用は、小学館刊新編日本古典文学全集『源氏物語』により、

巻名・巻数・頁数を付す。なお、傍線等は適宜補っている。

- (2) 『源氏物語評釈』「若菜下」四一五〇六頁。なお、今井源衛氏は、朱雀院の五十の賀にまつわる事柄が、「女三宮の惨めな姿を逆照射し、彼女を苦しめるものでしかない」(『源氏物語若菜下巻末の意味するもの』『今井源衛著作集第一巻 王朝文学と源氏物語』笠間書院 二〇〇三年 二〇三頁)と指摘する。
- (3) 袴田光康氏「摩訶毘盧遮那の一巻末の省筆」(『国文学解釈と鑑賞別冊 源氏物語の鑑賞と基礎知識 若菜下』二〇〇四年)。
- (4) 堀淳一氏も省筆に注目している(「さかさまに行く」儀礼 算賀の宴の時空間『源氏物語と儀礼』武蔵野書院 二〇一二年)。
- (5) 『紫明抄・河海抄』角川書店 一二五頁。
- (6) 源氏物語古注集成『花鳥餘情』「若菜下」二五一頁、源氏物語古註釈叢刊『岷江入楚』「若菜下」三九二頁。
- (7) 春日美穂『源氏物語』朱雀院の讓位―清和天皇讓位宣命との関わりから―(『日本文学論究』七九卷 二〇二〇年三月)。
- (8) 真言宗御室派総本山仁和寺「仁和寺の歴史」https://minaj.jp/about_history/ (二〇二二年三月一〇日閲覧)。
- (9) 「仁和寺」(『日本国語大辞典』ジャバンナレッジ版)、「阿弥陀三尊像」(『国史大事典』ジャバンナレッジ版)。
- (10) 源氏物語古注集成『孟津抄』「若菜下」四〇四頁。
- (11) 「毘盧遮那如来」(『仏教語大辞典』ジャバンナレッジ版)、「大日如来」(『日本国語大辞典』ジャバンナレッジ版)、「大日如来」(『仏教語大辞典』ジャバンナレッジ版)。
- (12) 寛平二年太政官符については、武内孝善氏「仁和寺の創立と寛平法皇」(『印度学仏教学研究』第三七卷第二号 一九八九年三月)に詳しい。
- (13) 新訂増補国史大系「類聚国史」前編 卷廿八、群書類従「新儀式」第四、資料纂集『吏部主記(増補)』などに儀式の次第が説明されている。

- (14) 賀の概略については、「算賀上下」(『古事類苑』礼式部十七 吉川弘文館 一九六八年)、中村義雄氏「老年期」(『王朝の風俗と文学』塙書房 一九六二年)、江馬務氏「賀の祝に就て」(『江馬務著作集第七巻』中央公論社 一九七六年)、小町谷照彦氏「賀宴」(『国文学解釈と鑑賞別冊』一九九一年二月)などが挙げられる。本論に関わる各論については別途掲出する。
- (15) 永井和子氏「源氏物語の年齢意識―光源氏四十賀の現実性」(『幻想の平安文学』笠間書院 二〇一八年 一七四頁)。
- (16) 湯淺幸代氏「太上天皇の算賀―主権の世代交代と准太上天皇・光源氏―」(『源氏物語の史的意識と方法』新典社 二〇一八年)。
- (17) 袴田光康氏「源氏物語」の算賀―宮廷算賀と直系皇統の視点から―(『平安文学と隣接諸学三 王朝文学と通過儀礼』竹林舎 二〇〇七年)。
- (18) 武者小路辰子氏「若菜巻の賀宴」(『源氏物語 生と死と』武蔵野書院 一九八八年)。
- (19) 川名淳子氏「若菜巻 光源氏四十賀について(一)―紫の上主催の賀を中心に―」(『研究講座源氏物語の視界四 六条院の内と外』新典社 一九九七年)。
- (20) 高田祐彦氏「光源氏の賀宴―儀礼と心の関係―」(『叢書 想像する平安文学第二巻『平安文化』のエクリチュール』勉誠出版 二〇〇一年)。
- (21) 前掲注17と同じ。
- (22) 小学館刊『日本国語大辞典』ジャバンナレッジ版。
- (23) 「仏は」の章段を以下に掲出する。
 仏は 如意輪。千手、すべて六観音。薬師仏。釈迦仏。弥勒。地藏。文殊。不動尊。普賢。
- (24) 「経は」の章段を以下に掲出する。
 経は 法華経さらなり。普賢十願。千手経。随求経。金剛般若。

(新編日本古典文学全集「枕草子」三三六頁)

葉師経。仁王経の下巻。

(『枕草子』三三五頁)

- (25) 紫の上主催の御賀に現れる経などの他作品における用例数は以下のとおりである。

最勝王経——『うつほ物語』一例

最勝御八講——『栄花物語』二例

最勝会——『大鏡』一例

寿命経——『栄花物語』四例

- (26) 河内山清彦氏「朱雀院五十賀と密通事件をめぐる——宇津保物語の影響——〔六条院の崩壊〕の問題など」(『青山学院女子短期大学紀要』三〇巻 一九七六年一月)。

- (27) 池田節子氏「『源氏物語』の算賀——光源氏四十賀と朱雀院五十賀の相違を中心に——」(『源氏物語の表現と儀礼』翰林書房 二〇二二年)。

- (28) このことは、宇多天皇の六十の賀を模したものであると考えられる。以下、宇多天皇の賀の様子を掲出する。

十九日壬寅。奉_レ為太上天皇増_二宝寿_一。京辺七箇寺。南京七大寺。修_レ御誦経。施_レ用絹六百疋布六千端。京七寺。東寺。西寺。延

暦寺。東塔。仁和寺。以上五所。絹各百疋。淨福寺。園城寺二所。

各五十疋。七大寺。東大寺。興福寺。元興寺。大安寺。薬師寺五

寺。布各千端。西大寺。法隆寺二寺。各五百端。

(新訂増補国史大系『扶桑略記』延長四年(九二六)

二月一九日 一九八頁)

十九日、内裏奉修六条院御六十賀誦経、平城七大寺、合布六千端進、京七寺絹六百疋、則於朱雀_二獄賑給_一、

(史料纂集「吏部王記(増補)」延長四年(九二六)

二月一九日 一九頁)

- (29) 河添房江氏「須磨から明石へ」(『源氏物語表現史 暎と王権の位相』翰林書房 一九九八年)。なお、朱雀帝が行った五壇の御修法につい

ては、「賢木」巻での桐壺院の霊の出現の可能性と、それに対する朱雀院の五壇の御修法を用いた対応について論じた(春日美穂「『源氏物語』「賢木」巻の五壇の御修法——桐壺院の霊出現の可能性をめぐる——」『大正大学研究紀要』一〇五号 二〇二〇年)。

- (30) 平安時代の仏教や毘盧遮那仏の説法」(『仏教学セミナー』四一号 一九八五年五月)。

大隅和雄氏「平安時代の仏教」(『国文学解釈と鑑賞別冊』一九九二年一月)。

頼富本宏氏「日本密教の成立と展開」(『日本密教』春秋社 二〇〇〇年 四九頁)。

長谷川岳史氏「毘盧遮那と釈迦——不空訳の解釈とその背景——」(頼富本宏博士還暦記念論文集『マンタラの諸相と文化 下——胎藏界の巻』法蔵館 二〇〇五年)。

頼富本宏氏「日本の大日如来」(『大日如来の世界』春秋社 二〇〇七年 一七三頁)。

西谷地晴美氏「盧舍那仏をめぐる時間と空間」(『古代日本の構造と原理』青木書店 二〇〇八年)。

猪股清郎氏「空海のメディア性の原点としての「大日即身」観——「大いなるもの」との自我我入による「大我」即「毘盧遮那」の構造——」(『仏教文化学会紀要』二四巻 二〇一五年)。

- (31) 浅尾広良氏「光源氏の算賀——四十賀の典礼——」(『源氏物語の准拠と系譜』翰林書房 二〇〇四年)。

- (32) 室田知香氏「父なるものの諸相 若菜上」(『新時代の源氏学 関係性の政治学Ⅱ』竹林舎 二〇一四年)。

- (33) 斎木涼子氏「平安時代の護国法会」(『年中行事・神事・仏事』竹林舎 二〇一三年)。

付記 本論は、令和四年度國學院大學國文學會春季大会で発表したものを礎としている。発表に際してご指導くださいました皆様に篤く御礼申し上げます。